

今だからこそ五輪中止を

朝日 18 日朝刊の 1 面トップは「五輪来日 危ういバブル」の大きな見出しの記事。同日のしんぶん赤旗 1 面の上野千鶴子・東京大学名誉教授の発言に注目したので、途中まで紹介したい。

新型コロナウイルス感染症が拡大する中、東京五輪・パラリンピックの開催を強行するという歴史的な愚行が、目の前で行われようとしています。そんな中で「しんぶん赤旗」等を除く大手メディアは、開催を推進する世論形成の共犯者になっています。まるで第 2 次世界大戦の開戦前夜のようなのです。

敗戦後、多くの市民や知識人が「開戦は仕方なかった」と言いました。他方で、開戦前や開戦後も、最後まで身を挺して「ノー」と言い続けた少数の人たちが確かにいました。

私たちは復員兵の子どもの世代です。親世代に「なぜ負けると分かる戦争を止められなかったのか」と詰め寄りました。今度は私たちが、五輪に「ノー」を言う番です。

日本学術会議会員候補の任命拒否でもそうでしたが、政府は専門家の意見に耳を傾けません。政府の分科会の専門委員さえ「こんな時に五輪はやらない」と言い出しました。

世論調査では、開催は反対が 5 割に達しています。低投票率だった東京都議選でも。五輪開催を強行する政権与党が負けました。頑なに政府が開催を強行しようとする五輪に国民は嫌気がさしています。

上野千鶴子さんは私と同世代、同年齢である。その上野さんから、「私たちは復員兵の子どもの世代です」という発言があった。今まで「復員兵の子ども」と考えたことはなかったが、確かに私もその一人なのだ。

かなり前にレポートに書いたが、私の父もあの戦争末期に召集され戦地に向かった。父に戦争、軍隊のことを聞いたが、あまり答えたくないようだった。もっと聞いておくべきだった反省している。

父が亡くなったあと、母から父の「回顧録」のようなものを渡された。そこに父が戦地に向かったあと生まれた姉のことも書かれていた。姉は父が復員するすこし前、不慮の事故で亡くなったという。父が復員したとき、母は父の前でわびたと書かれていた。母に姉のことを聞いたとき、悲しそうに黙っていたことを思い起こす。

「今だからこそ五輪中止」から、わが亡き父母のことに話がそれたが、この歳になって「復員兵の子ども」に気づかせてもらった上野さんに感謝したい。私たちが東京五輪に「ノー」を言う番であることを、再確認できたことも。

今だからこそ、五輪中止を言い続けたい。

(2021 年 7 月 19 日)